

第二編

政治・
●
経済

大口町史 現代史編

2

- 序 章 「大口」と呼ばれるまで
第1章 村政・町政の移り変わり
第2章 変わりゆくまちの姿
第3章 豊かな暮らしの実現
第4章 健やかな成長を願う
第5章 人口と財政
第6章 産業



序章

「大口」と呼ばれるまで

大口町域において「大口」と呼称されるようになったのは、一九〇六（明治三十九）年の町村合併により、大口村が誕生して以降のことである。それより以前から、この地には人々が生活を営んできた。

旧石器時代から縄文時代にかけて、わたしたちの先祖が活動しはじめ、各時代においても当時の人々は町域内で活躍し続けてきた。積み重ねられた痕跡は、現在も残る記録類や遺跡などから、その一端を知ることができる。

本章は、町域における原始時代から、大口村となり、一九四五（昭和二十）年八月のポツダム宣言受諾までのあゆみをたどる。ただし、本書は現代史をひもとくことが目的であるため、各時代における概要のみを紹介する。詳細については、一九八二年刊行の『大口町史』を参照していただきたい。

第一節 原始・古代

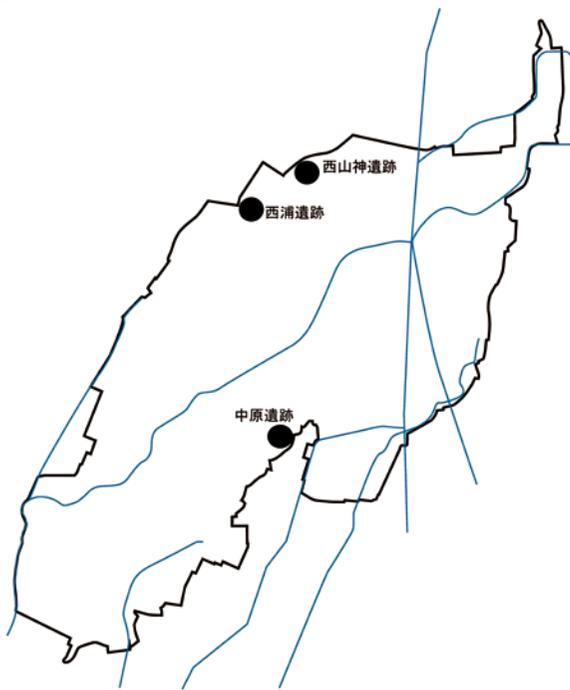
地質学でいう新生代、つまり哺乳類が台頭する時代のうち、約二六〇万年前以降を第四紀と呼ぶ。第四紀は地球上で人類が活動しており、石を打ち欠いた打製石器を使用しはじめた。その時期区分を石器時代と呼び、さらに約二〇〇〇年を境としてそれ以前を旧石器時代、以後を新石器時代と分けている。この区分は欧米を中心としたものであり、日本列島では同時期の土器出現を境に、旧石器時代以降を縄文時代と設定している。

旧石器時代のうち、日本列島で確実に人類の痕跡が確認できるのは約三万五〇〇〇年前以降の後期旧石器時代である。この時代の遺跡は列島各地で数多く確認されており、鍵となる地層（火山灰層）や各地で定型化したナイフ形石

器の消長を基準に時期を細分化している。愛知県において後期旧石器時代の遺跡分布が比較的集中しているのは、東から豊川流域、矢作川流域、濃尾平野となっている。当時は最終氷期の最盛期にあたり、平均気温は現在より約七℃ほど低く、それにともない海面が大きく低下していたため、海岸線は現在よりも遠く、伊勢湾及び三河湾は陸地であった。このため、現在湾内の海底にも遺跡が存在した可能性がある。

後期旧石器時代における尾張北部域の遺跡としては、犬山市の入鹿池周辺遺跡、小牧市の西之島遺跡・総濠遺跡、春日井市の上八田遺跡・梅ヶ坪遺跡・梅ヶ坪南遺跡が挙げられる。これらの遺跡は、確実に同時代の石器を確認することができ、立地の共通点として、尾張平野東部の洪積台地・丘陵上である。反対に洪積台地より西側にあたる犬山扇状地（沖積低地）には分布が希薄となる。町域内においては、後期旧石器時代の石器群を発見した西山神遺跡が存在するが、遺跡の帰属時期は縄文時代の可能性が高いため、明言はできない。このほか、町域において表採された石器が数点確認できるのみである（2-0-1）。

後期旧石器時代が終末を迎える頃、地球上では自然環境



2-0-1 旧石器・縄文時代における主要遺跡

に大きな変化が訪れる。旧石器時代を通じては氷期と間氷期を繰り返す氷河時代が続いた。氷河時代が終わると地球全体の温暖化が進み、北極や南極の氷床が減って世界的な海面の上昇をもたらした。日本列島では「縄文海進」と呼ばれている。約一万九〇〇〇年前から始まったこの現象により、日本列島は海に囲まれ、中国地方と四国地方が分離し、瀬戸内海が形成された。伊勢湾岸域をみると、これ

まで陸地であった伊勢湾・三河湾に海が流入し、縄文海進のピークにあたる約六〇〇〇年前は、現在の海岸線を越えてさらに内陸へと入り込んだ。その後、徐々に気温と海面が下がり海退が進み、約四五〇〇年前に小規模な海進、約三〇〇〇年前にさらなる海退が起こり、現在の地形が成り立っていった。尾張北部に広がる平野部に目を向けると、約一万二〇〇〇年前にあたる縄文時代草創期の頃は、後期旧石器時代に引き続き、遺跡の分布は小牧市の小牧山南遺跡、春日井市の梅ヶ坪遺跡など、洪積台地・丘陵上に集中する。町域でも犬山扇状地の微高地上にあたる中原遺跡なかはらで有舌尖頭器が採集されている。約一万年前の縄文時代早期に入ると、段丘より標高の低い位置にあたる平野部でも微高地を利用して人々が生活していた痕跡が確認できるようになる。

町域では北替地遺跡きたかえちのほか、扶桑町の下林遺跡しもはやし、犬山市の上野遺跡かみのなどである。縄文海進のピークにあたる約六〇〇〇年前は、平野部まで海岸線が進出したため、現在のところ町域を含めた平野部では遺跡が確認できなくなる。その後、海退によって徐々に平野部での活動が認められるようになった。

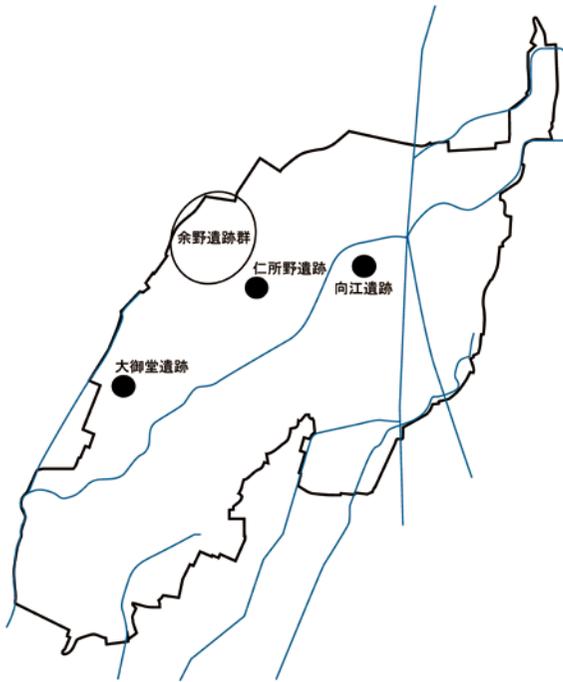
この縄文時代中期後半あたる時期には、町域の西山神遺跡、扶桑町の下林遺跡など犬山扇状地上の遺跡に加え、沖積地にあたる自然堤防においても一宮市の佐野遺跡、岩倉市のノンベ遺跡、清須市の朝日遺跡などが確認できる。しかし、これらの遺跡は中部高地にみられるような大規模集落ではなく各遺跡で想定される集落の規模は小さい。約四〇〇〇年前から縄文時代後期、晩期と続くが、この頃になると海退が一層進み、平野部には多くの遺跡が確認できるようになる。

尾張北部域における縄文時代の遺跡が最盛期を迎えるのは晩期である。この時期に代表される遺跡は一宮市の馬見塚遺跡まみづかであり、愛知県内で最大規模を誇る。町域では西浦遺跡にしゅうらが該当する。この遺跡では縄文時代晩期の土器とともに、弥生時代前期の土器が一点出土しており、両時代の移行期にあたる遺跡として注目される。

東アジアで育まれた農耕技術が、日本列島へ伝播でんぱ・定着して特に西日本に住む人々の生活様式が大きく変貌した。大陸からの文物は数度にわたって伝わり、水稻農耕とそれともなう道具が出現した。集落は周囲を堀で囲んだ環濠かんせう集落となり、金属器は技術革新と新しい思想を生み出し、

逆に争いという負の側面ももたらした。これらの縄文時代とは一変した弥生文化は、紀元前四世紀頃から始まった。尾張北部においては、清須市から名古屋市西区にかけて展開する朝日遺跡が代表的であるが、町域内でも弥生文化が花開いた（2-0-2）。特筆すべきは現在の余野地区を中心とする範囲で確認された余野遺跡群である。

余野遺跡群は、大小含めた集落遺跡が集中しており、時



2-0-2 弥生時代における主要遺跡

期は弥生時代中期～古墳時代中期が中心である。犬山扇状地を網の目のように流れる大小の河川で形成された自然堤防上に立地する。区画整理事業にともなう調査によって竪穴建物などが確認され、採集されたものはいえ、小型仿製鏡と小銅鐸が発見された（2-0-3・4）。その全容は明らかになっていないが、本来は犬山扇状地において当該期の拠点的な集落であったと考えられる。そして余野遺跡群の南東、河岸段丘上に仁所野遺跡が所在する（第三編第六章第二節）。仁所野遺跡は弥生時代終末期の方形周溝墓、全長約五〇メートルの前方後方墳と考えられている白山一号墳が立地しており、墳墓群の造営母体を余野遺跡群に求めることができる。このほか、町域では弥生時代に比定され



2-0-3 余野遺跡群（清水遺跡）で発見された小型仿製鏡



2-0-4 余野遺跡群（神明下遺跡）で発見された小銅鐸

る遺跡は余野遺跡群程の規模ではなく、向江遺跡は堅穴建物二棟及び溝状遺構、大御堂遺跡は堅穴建物一棟がそれぞれ確認できたが、それらの全容については不明な点が多い。

仁所野遺跡に所在する墳丘墓群は、弥生時代を代表する墓制であり、日本列島には各地域で特色を持った多種多様な墳形・副葬品を持つ墳丘墓が築造された。それらの規模も、時代が降るにつれて周囲の墳丘墓より規模が大きいのも現れた。このことは、徐々に権力と富を手にした人が出現したことを意味する。そして古墳時代になると、特定の個人が、他の人々と隔絶した権力と富が集中する社会となる。さらに、その個人のため、巨大な墳丘を有する古墳が出現した。

古墳は、前代までの墳丘墓とは違い地域性はなくなり、前方後円墳や前方後方墳という特徴的な形態にまとめられ、遺体を納める施設である主体部の構造・副葬品、墳丘上の葺石・埴輪など、古墳を構成する要素も地域差がなくなる。これは、弥生時代までにおける地域ごとのまとまりが「邪馬台国」を代表するクニへととなり、それらがさらに広域的な連合となった「ヤマト王権」の誕生へとつながっていく動きとして捉えられる。

古墳時代の開始時期とされる三世紀中頃より以前、二世紀後半以降において、後の前方後円墳・前方後方墳に繋がる同形の墳丘墓が築造された地域が存在した。尾張北部においては、清須市の廻間遺跡、一宮市の西上免遺跡に代表される前方後方形の墳丘墓が展開する。この特色は古墳時代に入って以降も前方後方墳が造営され続ける。

その後四世紀中頃になると、前方後円墳へと墳形が一変する。また、濃尾平野からの視点でみると、古墳時代の始まり以降、四世紀までは濃尾平野の扇状地・沖積地や



2-0-5 白山1号墳 (2017年撮影)

美濃山麓に前方後方（円）墳が多く築かれる。五世紀以降になると、これまで造墓活動がなかった名古屋台地周辺部で活発におこなわれるようになる。

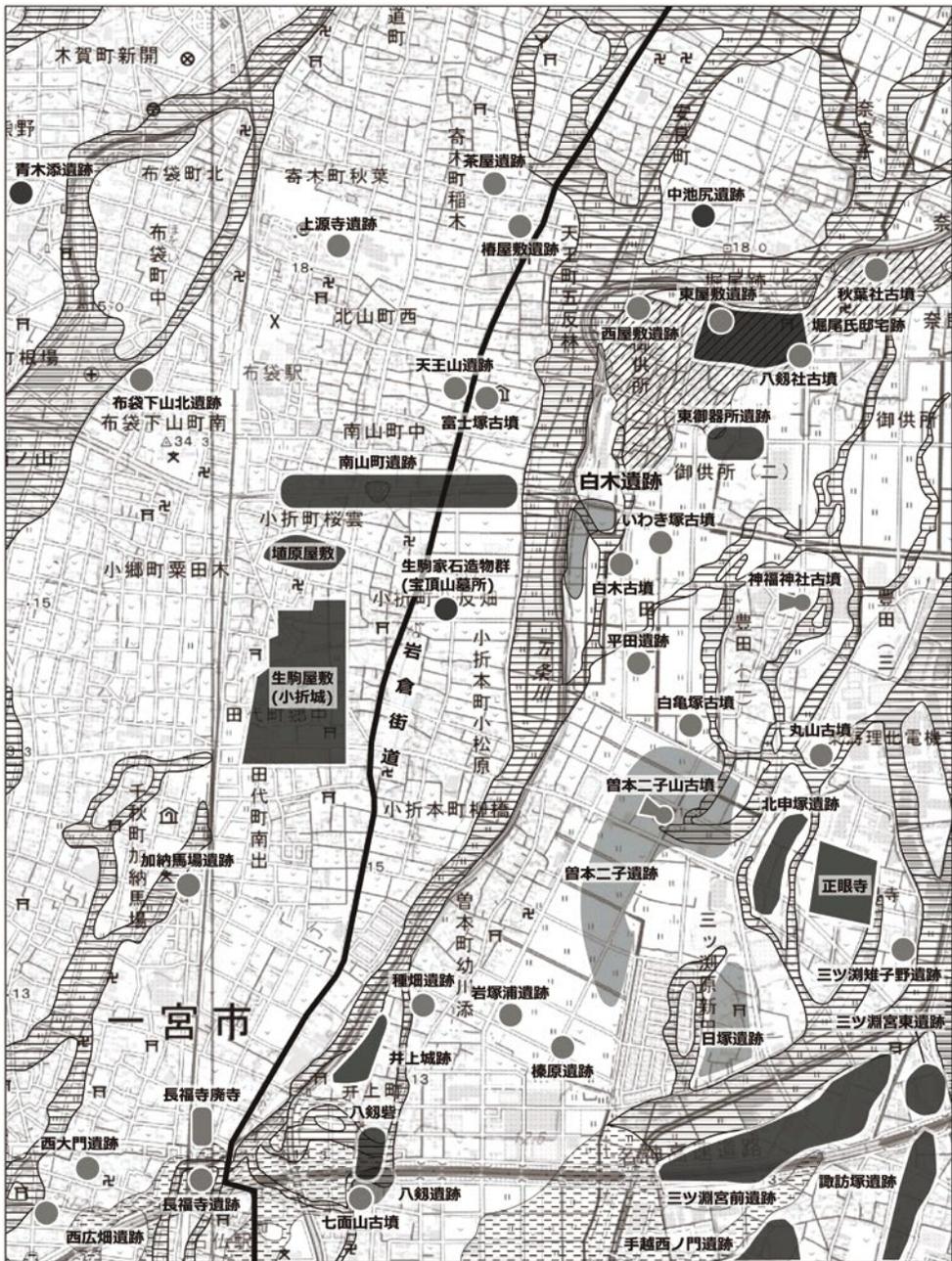
町域内では、仁所野遺跡の白山一号墳が挙げられる（2―0―5）。白山一号墳は、前方後方墳とされているが、詳細な調査を実施しておらず、その内容は不明であるため、現状では墳丘の規模・形状で認識されているに過ぎない。しかし、余野遺跡群は弥生時代に引き続き、古墳時代を通じて遺物も確認できるため、白山一号墳は仁所野遺跡の墳丘墓に後続する古墳である可能性も考えられる。

再び尾張北部における主要な古墳造営に目を向けると、三世紀後半から四世紀初頭に三角縁神獸鏡をはじめとした豊富な副葬品を備えた前方後方墳である犬山市の東之宮古墳が築造され、四世紀中頃の前方後円墳で県内二位の規模である犬山市の青塚古墳へと繋がる。そして五世紀に入ると犬山市の妙感寺古墳を最後に、尾張北部、特に犬山扇状地では大型の古墳造営が一旦途絶えてしまう。再び活況を示すのは古墳時代後期にあたる六世紀以降となる。

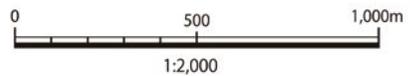
特に現在の江南市南東部から町南部にあたる範囲において、五条川の両岸に展開する複数の古墳が注目される（2

―0―6）。それらは六世紀を通じて継続的に築造されており、全長六〇mの前方後円墳で六世紀後半に築造されたとされている江南市の曾本二子山古墳を筆頭に、出土した埴輪から六世紀前半にあたる富士塚古墳、町域内には出土遺物から六世紀中ごろとされる、いわき塚古墳（第三編第六章第二節）、未調査の神福神社古墳が点在する。以上の古墳は五世紀までの大型古墳と比べ規模が小さい古墳であるが、その周囲には、滅失したものも含め、直径一〇m程度の円墳が立地していた。先述の古墳時代前・中期における犬山市域を中心とした造墓活動から、後期以降、この地で活発となることは注目できる。

このほか、町域内においては、滅失したものの、伝承のみ残っているものなどを含めると、約四〇基の古墳が確認できる。そのほとんどは、直径一〇m程度の円墳である。ただし、調査を実施しておらず、その様相について不明な古墳が多い。その中でも、先述と同規模の円墳を調査した際は、近世以降の塚、もしくは新田開発の際に発生した河原石などを塚状にしたもの、一八六八（慶応四）年の「入鹿切れ」由来の土砂を塚状に寄せ集めたもの（第一編第三章第一節）など、本来の古墳ではない事例を確認している。



-  段丘
-  旧河道
-  氾濫平野
-  旧石器～古代
-  中世～近世



2-0-6 大口町域南部周辺の文化遺産分布図（「白木遺跡」）

古墳時代は畿内のヤマト王権の拡大にともない、政治構造も築き上げられた。六世紀は、ヤマト王権に直接仕える集団がウジを形成し、ウジは支配下に部を組織して王権に奉仕した。そして各地方には元々存在した県あがたと呼ばれるものから国造に再編される。尾張では六世紀前半に断夫山古墳を築いたとされる尾張氏が台頭し、勢力を拡大した。七世紀に入ると、県内では古墳時代終末期にあたるが、畿内では中央集権国家への道程を歩み始める。

六世紀中ごろに朝鮮半島から仏教が伝来し、七世紀後半には地方にも広がっていく。それにもない、古墳から寺院へと権威の象徴が変化し、古墳の築造数も減少した。そして六四五（大化元）年の乙巳いっしの変（大化の改新）以降、地方に対して公民制の構築と戸籍の作成による税制の施行や、国評里制の成立に至る行政組織の編成をおこない、六九四（朱鳥六）年に藤原京を完成させた。そして七〇一（大宝元）年に大宝律令を制定し、中央集権国家としての体制を整えた。

七世紀において町域内に直接関係する地名などが記載された事例は確認されていないが、藤原京出土木簡のうち六九六年の「尾治国尔波評」と記されたものをはじめ、評

（郡）レベルのより広域の地名は確認できる。

その後、八世紀も同様に資料などは確認できないが、集落遺跡として注目すべきは白木遺跡である。白木遺跡は、豊田一丁目地内に所在し、弥生時代からおおむね八世紀前半まで続いた集落遺跡である。白木遺跡の調査により、直径1mの柱穴が一行に並び掘立柱建物、竪穴建物を検出した。白木遺跡周辺は古墳時代から人々の営みが活発におこなわれており、中世・近世に至るまで様々な文化遺産が集中している地域であることは、町域のみならず、周辺自治体を含めて特筆すべきことである。

奈良・平安時代を通じて、町域内に関係する史料はほとんどなく、九二七（延長五）年に成立した『延喜式』の巻九・十にある、「神名帳」に「小口神社」が記載されている。また、ほぼ同時期に編纂された『和名類聚抄』には、尾張国丹羽郡にある一三の郷名のうちに「小口」という名が確認できる。

第二節 中世

平安京を舞台として、天皇と一部の貴族を中心とした時代から、武力を背景に伸長した武士が徐々に権力を掌握する。鎌倉における武家政権の樹立を軸とするならば、その契機は、一一八〇（治承四）年に源頼朝が伊豆で挙兵し、一一八五（文治元）年の壇ノ浦の戦いで平家を滅亡させた。頼朝は全国に守護・地頭を設置し、一一九二（建久三）年に征夷大將軍となり、鎌倉幕府の確立となった。

この時期における町域内の状況について、その詳細は不明であるが、尾張北部に視野を広げると、源氏と平家の内乱である治承・寿永の乱の際、一一八一年に起こった墨俣川の合戦は墨俣の渡（現岐阜県大垣市）を中心に展開した。また、一二二一（承久三）年に幕府軍と後鳥羽上皇との間で起こった承久の乱では、尾張川合戦において尾張・美濃の国境である尾張川・墨俣川を挟んで、後鳥羽方と幕府軍が対峙している。町域を含め丹羽郡では、在地勢力として良峰氏がいたとされ、一族の一人である原高成が大縣神社の大宮司になったといわれており、原氏が町域周辺に影響

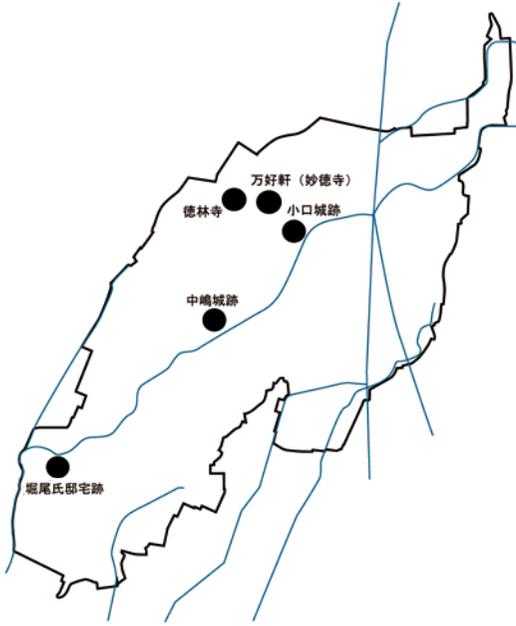
力を持っていた。また、当時の荘園として町域は、稲木荘の一部だったと考えられている。

鎌倉末期にあたる一二三三（正慶二（元弘三））年、幕府軍として活躍していた足利尊氏が、後醍醐天皇側につき、鎌倉幕府は滅亡した。一二三六（建武三（延元元））年に建武式目を制定し、室町幕府が成立するが、南北朝の対立は続き、合体したのは一二九二（明德三）年のことであった。一四〇〇（応永七）年頃、幕府の管領として中核を担っていた斯波氏が尾張国守護に任ぜられた。それに合わせ、以前より守護を務めていた越前から織田氏を尾張国守護代とし、両国支配を進めた。しかし、徐々に斯波氏の勢力が衰えていくとともに、尾張国内における織田氏の影響を強めていく。その中で、守護斯波氏を含めた継嗣争いが立て続けに起こり、一四六七（応仁元）年の応仁・文明の乱へと発展した。

応仁・文明の乱前後における町域内で、挙げなければいけない人物は織田遠江守広近であろう。広近は、尾張国守護代を務める織田郷広の次男として生まれ、守護代を継いだ兄・敏広の補佐を務めた。一四五九（長祿三）年に小口城を築き、応仁・文明の乱直前の緊迫した状況下において、

尾張北部の経営拠点とした(210-7)。小口城は本来古墳(小口城古墳)であった場所に築き、周囲を方形の堀で囲んでいたと考えられる。

広近はその後、一四六九(文明元)年に木之下城(現犬山市図書館南側)を築き、当時衰退していた徳蓮寺を再興し、名を徳林寺に改めた。そして一四七五年に隠居所である万好軒(現妙徳寺)を建てており、小口城・徳林寺・万好軒(妙徳寺)という町にとって重要な文化遺産や寺院を遺している(第三編第三章第二節)。



2-0-7 主な中世関係遺跡・寺院位置図

応仁・文明の乱から日本列島で戦国期に入り、尾張国内でも織田緒家による動乱が続く。その中で台頭してきたのが、織田弾正忠家の信秀・信長親子である。信長は家督相続後、一五六〇(永祿三)年の桶狭間の戦いにおいて今川義元を討ち、美濃の斎藤氏を視野に入れつつ、犬山・東美濃方面の攻略を始める。その際に小口城は信長に攻められている。『信長公記』によると、当時の小口城主は信長に敵対する犬山城の織田信清の支配下にいた中嶋豊後守であった。信長は小口城を攻めるも落とせず退却する。信長は拠点を清須城から小牧山城へ遷すと決め、築城が始まると小口城勢は守備し難いため、城を放棄して犬山城に籠もったといわれている。小口城は放棄後に廃城となった。

城主であった中嶋氏は、中嶋城跡(現下小口七丁目地内、JA愛知北育苗センター付近)に居を構えていたといわれており、時期は少し降るが余野神社には、中嶋佐兵衛尉が一五九七(慶長二)年に奉納したと刻まれた鰐口が遺る(第三編第六章第二節)。

信長はその後、勢力を拡大し、他の戦国大名とは一線を画していくが、一五八二(天正十)年の本能寺の変により最期を迎えた。信長亡き後、織田家の内紛が始まり、台頭



2-0-8 2010年の範囲確認調査で検出した内堀跡
 (『小口城跡範囲確認調査報告書』)

してきたのが羽柴秀吉であった。その過程で一五八四年に起こった、秀吉と織田信雄のぶかつ・徳川家康連合軍による小牧・長久手の戦いにおいて、小口城は秀吉方の砦として再利用された。この時に小口城は大規模な改修を受けたとされ、二重の堀と土塁に囲まれた縄張を展開した。その姿は、江戸時代に描かれた「丹羽郡小口村古城絵図」(名古屋市蓬左ほうさ文庫所蔵)から確認できる。

小口城は一九九四(平成六)年及び一九九六年に、公園整備(現小口城址公園)にともない、先述の絵図でいう「やぐら台」の発掘調査を実施した。ここでは、井戸・礎石・

野鍛冶跡のかじろなどを検出し、出土遺物は大半が小牧・長久手の戦いの時期(一六世紀後半)のものであった。また、二〇一〇年には、「やぐら台」東側に相当する曲輪くるわに存在した大口北小学校の移転にともない、範囲確認調査を実施し、内堀及び外堀跡、礎石をとまなう柱穴などを確認した(2-0-8)。ここでは遺物の出土量が少なく、時期については一部不明な点もあるが、内堀・外堀の検出など、当時の小口城の一端について把握できた。小牧・長久手の戦い後、秀吉は小口城の道具・柵・兵を犬山へ、兵糧を長島へ運ぶよう指示し、小口城は再び廃城となった。

小牧・長久手の戦いにおいて、町域内で生まれ育った武将が、秀吉方の武将として活躍した。名前は堀尾吉晴という。堀尾氏は菩提寺である大本山妙心寺の塔頭寺院、春光院ひかりのくに所蔵の「堀尾家譜系」及び尾張藩が作成した『寛文村々覚書』など、十七世紀に成立した史料から、吉晴の父である泰晴やすはるの代より尾張国丹羽郡御供所村(現大口町堀尾跡一丁目地内)を本拠としていた。堀尾氏の居館は、同地内に所在する八劔社境内を中心とした範囲と想定されている(2-0-9)。二〇〇九年に八劔社より西へ一〇〇m程の位置で県道小口岩倉線の建設にともない、発掘調査が実施され、

十五世紀後半から十七世紀前半に相当する堀立柱建物跡群、堀と考えられる大溝などを検出した。これらは方形居館の一部を構成する施設であり、堀尾氏の居館と考えられる。

吉晴は、一五四三（天文十二）年に泰晴の長男として生まれ、『太閤記』によると、信

長・秀吉・家康に仕えて日本列島各地で活躍し、一六〇〇（慶長五）年の関ヶ原の戦い後は出雲・隠岐両国二四万石を拝領して、現在の島根県松江市に所在する松江城と城下町を築いた。吉晴についての同時代史料は町内で確認することはできない。町内に限らず、吉晴に関する同時代史料の初見は一五八〇年の羽柴秀吉書状である。それ以前の動きは小瀬甫庵おせほあんのちに執筆した『太閤記』によるところが多い。このため、一五八〇年以前の事績は不明な点が多いが、町内出身の武将として注目すべき人物である。

また、「堀尾家譜系」で吉晴の長子とされる金助きんすけは、『裁



2-0-9 堀尾氏邸宅跡（2017年撮影）

断橋物語』で悲運の死を遂げ、その母が裁断橋の架け替えの際に刻んだ擬宝珠銘文は、母子の慈愛に満ちた文章であることでは有名である（2-0-10）。しかしこれは全て創作というものではなく、金助は先述の系図に記載されており、春光院の寺伝によると、一五九〇年の小田原征伐により亡くなった際、その菩提を弔うため吉晴が創建した俊巖院しゅんがんいんが改称したといわれている。また、擬宝珠も実物は名古屋市指定文化財となっている。よって、金助と擬宝珠の存在は確実といえるが、金助の母の実態など、明らかにっていないことも多い（第三編第四章第三節）。



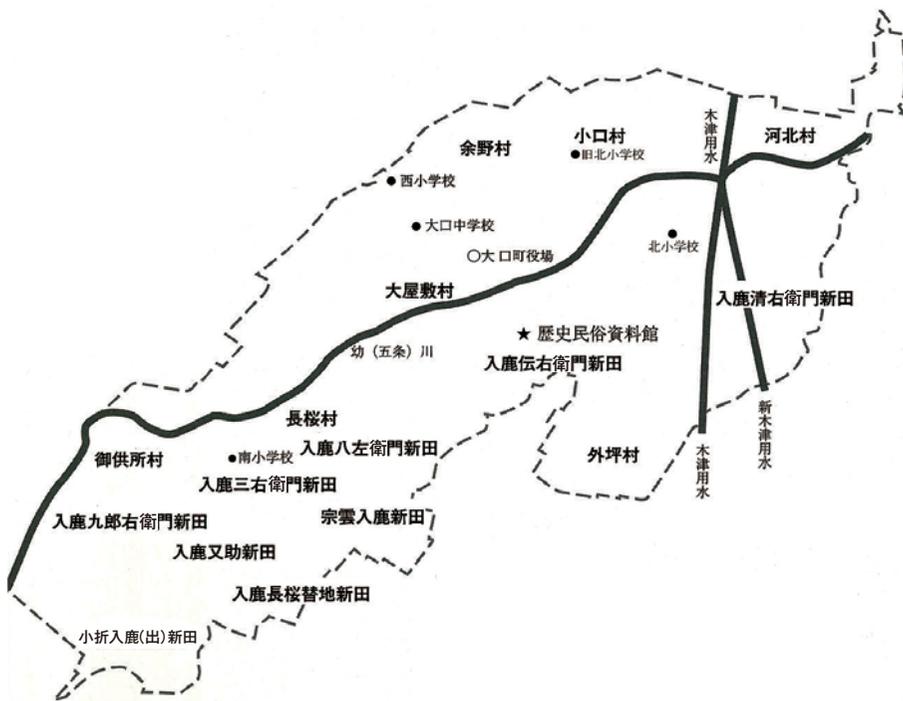
2-0-10 堀尾跡公園に復元した裁断橋（写真上）と擬宝珠（写真下）（2017年撮影）

第三節 近世

一六〇〇（慶長五）年の関ヶ原の戦い後、徳川家康の四男である忠吉が清須城に入るが、一六〇七年に病死したため、家康は九男義直を配置する。義直は一六一〇年に清須越により名古屋に城下町を形成した。その前年より名古屋城築城も始まり、一六一四年に本丸御殿が完成し、翌年に義直の婚儀が執りおこなわれている。

町域周辺では、三河出身で幼少より家康に仕え、義直の傅役であった成瀬正成が、義直の後見役であった竹腰正信とともに藩政の最高職である両家年寄、付家老となり、一六一七（元和三）年に犬山城を二代將軍秀忠から拝領する。このように、尾張藩としての体制が整っていく中、町域内の村々もその支配に組み込まれていく。しかし、江戸時代に成立した主要な街道である岩倉街道（柳街道）、上街道及び稲置街道に挟まれた地域に立地するため、街道沿いの村と比べ商家がほとんどなく、農業が主体の村であった。

町域の江戸時代における村々にとって、関係が深い事項は、治水・用水工事と新田開発である。一六〇八〜九年に



2-0-11 江戸時代における大口町域の村々（『まんが大口町の歴史』）

家康がおこなった木曾川の築堤工事は、御囲堤おごいづみとして有名である。以降、十七世紀中頃までに、尾張北部では灌漑施設かんがいが整備された。町域内に直接関係のある灌漑施設は、一六三四（寛永十）年に入鹿池、一六五〇（慶安三）年に木津用水、一六六四（寛文四）年に新木津用水が完成した（第一編第一章第一節）。これらの完成により、既存の村々で新田開発が進み、さらに新田開発を契機として新しい村も成立している。

具体的に、町域内で従来から存在していた村（小口村・河北村・余野村・外坪村・大屋敷村・長桜村・御供所村）に加え、新田開発によって新しく成立した村として、入鹿清右衛門新田・宗雲入鹿新田・入鹿伝右衛門新田・入鹿八左衛門新田・入鹿長桜替地新田・入鹿三右衛門新田・入鹿又助新田・入鹿九郎右衛門新田・小折入鹿出新田がある（200-11）。全ての新田村に「入鹿」と付くのは入鹿池築造を機に成立したためである。新田村は町域南部に多く成立し、自立した運営をおこなったため、例えば神社も新田村単位で創建している。神社が町域北部に比べ、南部に多く立地している由縁である（第三編第三章第一節）。

これらの村々の状況について、当時の地誌である一六五

	1670年頃			1822年頃		
	戸数(戸)	人数(人)	馬数(匹)	戸数(戸)	人数(人)	馬数(匹)
河北村	46	287	23	85	356	7
小口村	202	1,050	65	417	1,941	36
余野村	72	421	18	132	520	10
外坪村	33	221	7	68	201	6
大屋敷村	82	529	36	137	538	13
長桜村	11	74	6	22	80	2
御供所村	59	329	21	142	583	12
入鹿長桜替地新田	13	47	3	29	115	1
入鹿八左衛門新田	5	22	1	14	64	0
宗雲入鹿新田	6	33	3	22	87	3
入鹿九郎右衛門新田	5	35	2	4	12	0
入鹿三右衛門新田	3	5	2	3	15	1
入鹿又助新田	1	3	0	0	0	0
入鹿清右衛門新田	7	30	2	16	44	1
入鹿伝右衛門新田	8	46	4	26	110	3
小折入鹿出新田	6	53	2	18	91	3
合計	559	3,185	195	1,135	4,757	98

2-0-12 江戸時代における村々の状況（『寛文村々覚書』『尾張御行記』）

五〇七三（明暦〜寛文年間）年頃にまとめられた『寛文村々覚書』と、一八二二（文政五）年に完成した『尾張御行記』をみると（200-12）、新田開発によって成立した村でも、以前から存在する村々より圧倒的に規模は小さいことがわ

かる。新田村が成立して間もない『寛文村々覚書』によると、戸数が一〇を超える新田村は、入鹿長桜替地新田のみで、それ以外の新田村は一桁となっている。

そして約一五〇年後にあたる『尾張徇行記』に記載の新田村の状況と比較すると、順調に規模を拡大した村もあれば、規模が縮小、もしくは村そのものが消滅したところも存在する。新田開発以前から存在していた村々は、約一五〇年間で着実に規模を拡大しているのとは対照的である。

『尾張徇行記』にはほかに、河北村が成瀬氏の采地（領地）、小口村が成瀬氏と同じく尾張藩付家老であり、美濃国今尾（現岐阜県海津市）を領していた竹腰氏の采地であったことが記載されている。また、町域内において河北村・小口村以外の村々は尾張藩領であり、この頃には一七八二（天明二）年に設けられた小牧代官支配所と年貢・諸役の納入、書類の届出、願書の提出、藩からの触れについて村内への伝達などのやり取りをおこなった。

江戸時代の村々は、農業を軸に生活・祭礼などを通じてそこに暮らす人々の繋がりが強く結ばれた。江戸時代の村単位が、現在まで続く地域の原型となっている（第四編第一章）。

第四節 近代

一八六八（慶応四）年に起こった入鹿切れにより、町域内の村々で二三〇人以上の犠牲者を出した頃（第一編第三章第一節）、日本列島は戊辰戦争の最中であった。入鹿切れの起きた五月十四日はちょうど尾張藩が組織した民兵の部隊、草莽隊が甲信・北越への派遣のため、名古屋を出発する直前のことであった。一八六九（明治二）年五月、函館の五稜郭において戊辰戦争が終結し、新政府による様々な仕組みが試行錯誤しながら整えられていく。地方制度については、一八七一年の戸籍法・廃藩置県以降となる。

当時の町域内にとって直接関係する出来事としては、一八七二年の愛知県区画章程により、江戸時代から続いていた村々が大区小区制に組み込まれたことである。区画章程では、町域が位置する丹羽郡は第四大区となった。小区は町域内の村々がまとまっていたわけではなく、小口村・河北村は現扶桑町北部と現犬山市の一部とともに第三小区、余野村は、現扶桑町南部とともに第四小区、それ以外の町域内の村々は第六小区となった。

一八七八年には郡区町村編成法公布にともない、小口村（小口村と入鹿清右衛門新田が合併）・河北村・余野村・外坪村・大屋敷村・秋田村（長桜村・宗雲入鹿新田・入鹿伝右衛門新田・入鹿八左衛門新田・入鹿長桜替地新田が合併）・豊田村（御供所村・入鹿三右衛門新田・入鹿又助新田・入鹿九郎右衛門新田・小折入鹿出新田が合併）となり、一八八九年はさらに小口村（小口村・余野村が合併）、富成村（河北村・外坪村が合併）、太田村（大屋敷村・秋田村・豊田村が合併）へと集約された。余野村は一時期柏森村へと編入されるが、一九〇六年、小口村・富成村・太田村・余野が合併し、大口村が成立した（2-0-13）。大口村成立時の人口は七三〇〇人、戸数一四一八戸であった。

合併当時の様子について、「太田・小口・富成各村の合併に関する議事録 別紙」に各村の考え方が端的に表れている。その史料によると、県から提示された合併案に対し、県知事発の諮問を受けた各村会がそれぞれ答申をしている。太田村は小口村・余野を合併して「田口村」にするという案に賛同し、小口村は太田村と同じ内容の諮問を訂正し、太田村・富成村・余野を合併して「大口村」とすると答申している。富成村は、楽田村・羽黒村・池野村と合併し、



2-0-13 1906年大口村合併直前における各村の位置図（『まんが大口町の歴史』）

「二宮村」とする合併案に賛同している。

一九二二年は、降雹に見舞われた年であるとともに（第一編第三章第一節）、野田正昇が村長に就任した（第三編第七章）。一九一〇～二〇年代は、村及びその周辺自治体において、養蚕を含めた製糸業が盛んとなる。野田は一九一四（大正三）～一八年の第一次世界大戦後の不景気により、扶桑村高雄（現扶桑町高雄）に所在した扶桑製糸が休業した際、扶桑村長とともに昭和館として再発足させている。

この頃の村域内は、昭和館のような製糸工場が建設されることはなかったが、養蚕組合が各地区に誕生し、桑苗の生産から蚕の共同飼育、繭の共同販売をおこなった。製糸業の隆盛も、一九二七（昭和二）年から始まる世界的な恐慌により、他の産業を含めて徐々にその影響を受けていった。

一九三七七年の盧溝橋事件より、本格的な戦時下となった日本において、村には軍需工場などの施設がなかったため、空襲に見舞われることはなかった。しかし、北に各務原陸軍飛行場（現航空自衛隊岐阜基地）、南に小牧陸軍飛行場（現県営名古屋空港）や、名古屋・一宮などの主要都市があるため、特に終戦間際は往来する爆撃機に緊張感が走り、

焼夷弾も投下され、二人亡くなっている。戦争を直接体験せずとも、当時の村内の人々は一九三八年の国家総動員法公布後、銃後の軍事援護活動を推進した。また、村内は終戦間際において都市部からの疎開を受ける側であり、家族単位の疎開受け入れをはじめ、桂林寺・徳林寺などの寺院では名古屋市内の小学校児童の集団疎開があった。

戦争中と戦後

当時は各家で防空壕といって、屋敷の空き地に大きな穴を掘り、上に板を乗せ、上空から見えないようにしました。空襲警報発令の合図が出ると防空壕の中に入り避難しました。当時は竹藪が多くて、伝右（現大口町伝右）に焼夷弾が落ちた時には、パンパンと竹のはぜる音がして大変こわかったのを今も覚えていいます。学校へ行っても空襲警報が発令されると、家に帰り、豊田八刃社の前に「馬場」という春と秋の祭りに馬を走らせる高台があり、そこにのぼりました。まだ高いビルもなく、名古屋の栄町・大曾根あたりに爆弾が落ちて炎や煙の上がるのを見ていました。

戦後は、家も焼けて食糧がなくて食べるのに大変で、東京や名古屋から身内を頼りに大口村へ疎開してきていました。

田舎には食べ物の余裕があるので、名古屋方面から衣類を風呂敷に包んで布袋の駅から背負い、米・麦・さつまいも・あわ・キビなどと物々交換をしていました。学校の運動場一面は麦畑で、昼の放課に麦ふみをしました。夏から秋にかけて、三年生から六年生まで養蚕が盛んな農家に桑の木の皮むきの手伝いに二時間ずつ行きました。帰りに芋饅頭まじも・さつまいもの蒸したのをもらいました。

(昭和十二年生まれ)

空襲と防空壕

昭和二十年の夏、私は小学校低学年でした。国語の授業を受けていたとき、担任の先生が急に大声で泣きだしました。何故泣くのかなあと不思議でした。日本が戦争に負けたことが原因だということが後でわかり驚きました。

一年生の頃、図画の時間は戦闘機とか軍艦ばかりを描き、先生も上手に描けたとよく褒めてくれました。放課後の遊びは戦争ごっこが多く、何事も戦争一色でした。

近くには小牧の飛行場や各務原の飛行場など軍需工場があったので、艦載機による空襲は頻繁にありました。名古屋市辺りはB二九爆撃機による激しい空襲があり、夜に友達と近所の見晴らしの良いところへ出かけ、申し訳ないことだがるで花火

のような名古屋空襲の光景を見ました。大口村に生まれ住んでいて良かったと思いました。

(昭和十五年生まれ)

戦争の思い出

戦地へ行くことになった兵隊さんは、召集令状が役場を通じて届くと、お宮さんにお参りし、たすきを胸に巻き、日の丸のはちまきで大勢の村人に見送られ戦地に向かいました。悲しいことですが、ほとんどの兵隊さんが帰らぬ人となりました。

終戦間近のことですが、お宮さんで竹槍たけやりの軍事訓練を見たことがありました。年寄りと主婦が中心で、藁わらの人形を敵と見立て、突進し竹槍で刺すといった訓練でした。アメリカ人は背が高いとの噂うわさで、鳥居を目指して届きもしない竹槍の訓練をしていました。

暗くなつてから近くのお宮さんへ行き、南の方を見たら、B二九の爆弾投下で炎上する名古屋方面がまるで雷が落ちたように見えました。後でわかりましたが、見たのは名古屋大空襲でした。

(昭和十五年生まれ)